

EDeC セミナー小学校期を考える「金森俊朗の授業論と模擬授業」(2016年6月11日)

参加者の自由感想 (辻先生のまとめはラストに)

授業は最後は自分とつながる、自分が見えてくる・・・ということが、最初どうということなのだろうと思っていましたが、海蔵さんの生き方を読んでいくうちに人間の幸せとは豊かさとは何だろう？そして自分はどう生きていくのかということに行きつきました。子どもが「知りたい！読みたい！書きたい！」と内からわきあがってくるような授業をめざしたいと思いました。

海蔵は「いよいよこうなったら俺一人の力でやりとげるのだ」といったが、私は、海蔵は決して独りぼっちではなかったと考える。海蔵の中には母や地主の言葉がしっかりと生きていたのではないだろうか。また、肉体としてはこの世から消え去っても、その人が考えたことや、思い、やり遂げた仕事としてはこの世から消え去っても、その人が考えたことや思い、やり遂げた仕事としては、この世から消え去っても、その人が考えたことや思い、やり遂げた仕事は、後世にも引き継がれることを強く感じる作品だった。ありがとうございました。金森先生がお元気そうで安心いたしました。

今回も、とても楽しく参加させていただきました。また、次の機会にお会いできるのを楽しみにしております。

今回の作品を読んで、自分のことしか考えないと動けない、人の気持ちがわかり、人の気持ちをくんで、実際に見たことを大切にしないと、大事なことが見えないぞ。海蔵も欲に負けて悪い心になったり、目の前のリアルを世界をちゃんと見る目を養うことが大切だというメッセージに感じました。子ども達のなかのリアリズムを無視して教科書を読んでもそれは学んだということにはならないのだと思います。重いがあふれ、突き動かされるように、語りた、伝えたいという学びの実現のために引き続き勉強したいと思いました。

子と子、子と教師、子と地域をつなぐものに文学があったり、算数、社会でもできるのかなと思いました。そして遊び、時間がない一番の障害は、子どもが遊びを失ったこと。子どもを生かすために仕事をしたいと改めて思いました。ありがとうございました。

金森先生、とても勉強になる考えされられる模擬授業をしていただき、ありがとうございました。今日が楽しみで一週間の幼稚園実習を頑張れました。1年もの期間をかけて教材を見つけ、文学を研究することの重要性和文学の面白さを改めて感じる事が出来、自分ももっと頑張らないといけないとわかりました。今日の学びを今後の自分につなげていきたいと思ひます。今日は貴重な時間をありがとうございました。

今日学んだことはたくさんあります。特に2つにまとめて書きます。まず、一つ目に先生の勉強がどれだけ大切かということです。先生の教材研究なしに、子どもに何を伝えることができるのかと深く考えさせられました。やっぱり未熟者なりに今は勉強をしたいです。そしてもう一つは自分にも海蔵の母のようなお母さんがいると気づけたことです。教材を通して、自分の周りと照らしあわすことが出来ました。今の周りを大切にしたいです。

現在すんでいる地域の小中学校が近い地域と統合され、それでも1学年20人弱で中学卒業までいくと思ひます。体育の授業でできる種目や、音楽では、合奏できる楽器、休み時間にはドッジボールができないなど、デメリットがとても不安です。中学にあがると、部活動もかぎられますし、授業でも、良い意味での競争心をも育たないと現役の教師から聞きました。現在年少の娘を持つ母親です。教師ではありません。小学校の先生も、少人数学級のメリットを生かすような教育をしていないと感じました。(散歩しているときに、外で生徒に対しての先生を拝見して思ひました)やはり人数は多い方が良いと思ひのですが、金森先生はどう思われますか？

本日は貴重な講演をしていただき、ありがとうございました。私が今回この講演を聞きに来たのは大学の講義で日本一の先生として金森先生を紹介していただいたからです。本当に今日は聞きに来て良かったです。教員を目指す私としても、勉強するべきだとあらためて実感しました。本当にありがとうございました。是非機会がありましたら、岐阜聖徳学園大学でも講演していただきたいです。お体にきをつけて、早く万全な体調に戻ることを願っています。ありがとうございました。

私が教育大学に通っていて、今、自分がどんな教師になりたいのか、務まるのか、不安だらけでさまよっている状態でした。講演を聴いて、今、私はもう一度自分が教師になる意味、どうなりたいのかじっくり考えていきたいと感じました。いろんな本を読んで、新しい自分に日々出会おうと思います。それが、後に教師になると決心したときにも、最大の引き出しになると思いました。本日は貴重な時間を頂、ありがとうございました。さすが、私の大学の先生が紹介した日本一の先生だと思いました。

道徳の授業で高橋尚子や、北島康介の授業を参観しましたが、「高橋さんはすごい」「北島さんのようには出来ない」という振り返り画多かった。能動的なところが強調されているから、子どもたちの心には入ってこないのだと感じた。

久しぶりに文学作品をじっくり読み、味わうことが出来たように思います。「手ぶくろを会に」や「ごんぎつね」は授業をしたことがありますが、「牛をつないだ樁の木」を読むのは初めてでした。最後の「ただにこにこしながら町の方へ坂をのぼっていきました」の海蔵さんの気持ちが伝わってきました。その後の七の場面もすごいと思いました。すばらしい作品と出会わせてくださり、ありがとうございました。

文学的文章の読みについて、言語活動のことを言われることが多かったのですが、違った目線での読み方を知ることが出来ました。リアリズムを大切に、子どもの中に入っていく学びを提供できるようになりたいと思いました。

私は今日の講義から”人”は必ず死があり、それがいつかはわからない。一人ひとりが生きる時代、生死を乗り越えてつなぐものがあるということ、それは、本当に感動的なものだと感じた。

今日は文学の授業を受けさせていただきました。子どもたちへのメッセージとして、何を大切にしていくか、今まで悩んだことの答えが少し見えてきたように思えます。ありがとうございました。

「牛をつないだ樁の木」の話に入り込んで講義を受けさせていただきました。今の教育にかけている点をととてもわかりやすく解説してくださったので、それを踏まえて明日から授業をしていきたいです。

教科書の教材には、海蔵さんのような人が取り上げられているものがないと言っていた。もっと教材研究が必要だと思ったし、そのためにはたくさん本を読まなければならないと思った。

久しぶりに金森先生の講義を受けました。自分では、頑張っって読み取りをしていたのですが、様々な人や金森先生の深い読み取りを聞いて、まだまだ足りないと思いました。深く読みとれるよう様々な経験をつみたいと考えた。

久しぶりに金森先生のお話、授業からたくさんことを学びました。現場では、活用力、アクティブラーニング、成果物といろいろなことを叫ばれ、国語もあわただしいですが、今日でも視点をたまに変えることの大切さ、一つの物語を選び抜き、子どもと味わうことの大切さを感じました。ありがとうございました。

子どもにとって文学はどういう意味があり、具体的に金森さんが紹介してくれた作品をとおして、自分や人間を見る大切な教育だと実感した。文学のよさを感じるステキな時間でした。

学力についての解釈、物語を通しての発想の広げ方、子どもたちに本を読むように進めるのに適した方法など、様々なことを学ぶことができました。

自分一人では読むこともなかった書名でしたので、とても良かったです。海蔵さんは誰でもとっつかまえて、言いたい気持ちでした。しかし、そんなことは言わないで、ただ、ニコニコしながら町のほうへ坂を上っていきました。が、とても心に響きました。私の仕事に似ているせいでしょうか。金森先生、お体を大切になさってくださいね。ここへくるまで知りませんでした。

絶対面白い、ためになるとわかっているけど、いざ、講座に向かう瞬間はつい足踏みしてしまいます。今日は同じゼミの友達を誘って、元気よくすることが出来ました。金森先生のお話を聞くと、少し道が見えるように感じるのに、小学校に戻ると気づけば残念なことばかりしています。年に何度か頑張っただけで会いにくくすることで、自分を見つめなおし、また頑張ろうという気持ちになれます。今日、たくさんの本の名前をメモできました。読書の時間を増やして生きたいです。ありがとうございました。

本をよむことの大切さが今まで以上にわかった。

私が心に残った絵は、参照の終わりの場面です。しんたのむねをのぼっていく海蔵さんの姿です。自分が変わっていかねばいけないと思っていたからかもしれません。人は変えられるのだと、周りの人から影響を受けながら変わっていけるのだと勇気をもらいました。今日はありがとうございました。

今日の講義では、新しい文学を読み、考えることで、ただ、教科書をこなすのではなく、教材研究の質や量が教師には大事だということを改めて考えさせられました。まだ、先生の授業を日々受けられるので、いろんな事を吸収していきたいです。

金森先生の3回の授業論を受けることによって、自分の思い描いていた授業のイメージを変えることが出来ました。松村先生が仰っていた、「人が人に変えられる」と言っていたように、まさに、金森先生によって、私は変わることが出来ました。ぜひ続くことを期待しています。

小学校で授業をするとき、何を伝えたいのか教師がしっかりとわかっていないといけな。そうすることで、子どもに伝わるし、良い授業になる。授業とは、学問、文化、世界、何事、自分、人間が見えてくる。はじめて読む題材で、感銘をうけました。地主が変わったように、利助もきっと心うごかされ、海蔵が一步踏み出したことが広がったのではないかと想像しました。

リアリズムとは・・・リアリズムについてもっと考えようと思った。リアリズムに対する理解を深めたい。すると、牛のつないだ樁の木をより理解できて、考えられるものも増えると思った。

本を読むということがどれだけ大切かということを知った。

私は自分のために、性格が利助と似ているなと思っていました。最後の七の場面では、道につかれた人々と具体的ではないため、自由に自分なりに想像することが出来ます。学生、働いている人々・・・たくさんの中に利助もいると私はイメージしました。あの時は、協力する気持ちが沸いてこなかったけれど、他人のために行動することの大切さを海蔵からうけついでいてほしいと思いました。地主が変わったように私に似ていると感じた利助にも変わってほしいと感じたと同時に私もそうやって、変わっていきたくてと思いました。ありがとうございました。

ありがとうございました。伝えたいことがまだまとまっていないので、後ほど感想を伝えます。最後とは言わず、アンコール！

今まで知らなかった新見作品を学べて、新しい知識が増えた。おもしろい内容でよかった。最後の模擬授業、ありがとうございました。

学生の今のうちにいろんな文学作品にふれようと思います。教えるものが耕されていないのに、子どもを耕すことは出来ない。今のうちにたくさん学び、自分の知識を耕しておきたいと思います。ありがとうございました。国語もそうだが、授業や教科書から「リアリズム」を感じられるように、教師は工夫をしていかないとはいけなのだなと今回そう思った。

教材選択も教師の大切な仕事だとわかりました。また、年度当初の学年の教科書の目次を見て、何、どこを育て

るかを見極めるという話も、とても勉強になりました。ありがとうございました。

新美南吉作品はいくつか知っていましたが、このお話は詳しく知りませんでした。私は実際に半田後に行きましたが、生家を含め、新美南吉に関わる多くのものが残っていました。金森先生のお話を聞き、語り継がれ、受け継がれていると改めて感じ、それが、新美南吉の作品にも表れていると思いました。本日はどうもありがとうございました。

今回の講演を受けて児童文学の大切さを実感しました。自分で学びたくなった。私自身、本を読む習慣があまりないが、そんな私でも心が動かされた作品があるのだから、この気持ちを子どもに伝えたいと思った。

今回の講義で、教師がプロと呼ばれるならリアリズムをしっかりと伝えられる語りが大切であり、読書の必要性を強く感じた。人の言葉が人の行動を変えるというのが「牛をつないだ樁の木」を読んで深く関心した。

「牛をつないだ樁の木」は、一つ一つの場面の描写が詳しく書かれていたので、このとき海蔵はどんな気持ちなのか考えながら深く読み取っていくことが出来、とても面白かった。教師が深く考え、子どもたちの考えに対し、共に読んでいく大切さを学べた。

自分たちの周りにも、当たり前のように利助や海蔵がいます。切なくて、なけました。今、自分が悩んでいることに、道が開けた気がしました。ありがとうございました。

私は子ども二人が井戸の水を汲んで飲んで飲んでいる姿が、とても想像することが出来た。特にその姿を見て、海蔵が微笑んでいるときの海蔵の気持ちが伝わりました。井戸を作るまでの過程・苦労や母、地主の会話が脳裏を巡っていたと思う。井戸ができてから、助かった人が多くいる。庶民の人も立派に「自分が生きてきた足跡」を残すことができたのだ。私も、いきている中で自分が生きていた足跡をのこせるような実践や行動をしていきたいと強く思った。お疲れ様でした。社会頑張ります。

「牛をつないだ樁の木」を金森先生と読んで、涙が出そうになるお話で、海蔵さんと母親の人柄と行動・関係性がすごく心に残りました。村人のために、1杯の水を飲むために、自分で必死になって動く、好きなものも我慢して、その人柄と支えられている周りの人を知り、自分を見つめられる作品であると共に、自分もこうなりたいとか、自分を動かしてくれた人はだれかな？とか考えられました。プロとして、そのような作品を探す！それを目指したいと思いました。これからの元気・希望になりました！別の話ですが、何気なくボケっとすごしていた大学時代から「学びたい！子どもが本当に学びたいと思っていることを学びたい！」と学びへと動かしてくれたのは、あの上越教育大での金森先生の講義があっただけでした。それを聞き、ハッとさせられ、佐久間先生にアポをとったことを思い出しました。もっともっと学んで、周りを大切にして、子どもと豊かに学べるよう頑張るぞ！ありがとうございました。

まとめ

辻 直人(北陸学院大学・日本生活教育連盟石川サークル)

今年で6回目で最終回となった北陸学院大学公開講座「金森俊朗の授業論と模擬授業」。今年は教材に新美南吉「牛をつないだ樁の木」を用いて、場面を丁寧に読み解きながら主人公の海蔵さんはどんな人物だったのか、お母さんは海蔵さんにとってどんな存在だったのか、などを考えていきました。

今回作品を読んで気付いたことは、新美南吉は人から人への語りを大事にしているという点です。語り継がれ、受け継がれていること、人と人とのつながりや関わりを大切に考えていたように思われます。代表作「ごんぎつね」も、冒頭は「これは、わたしが小さいときに、村の茂平というおじいさんから聞いた話です」と始まります。この物語は、海蔵さんという一庶民が道行く人のために貯金をして井戸を掘ったというささやかな話を伝えようとしたものであり、掘った井戸そのものが歴史を物語っています。たとえ名前の残るような仕事でなくても、海蔵のお母さんにとっては、村の人たちや井戸を使う人たちに語り継いでいきたい話なのです。恐らくこの小説に

続く場面では、お母さんが海蔵の遺影に話しかけたり、井戸の辺りに座って道行く人に声をかけて息子のことを伝えたりしたことでしょう。新美の作品からは、伝え合うことの大切さを教えられます。

人間関係の希薄化が言われるようになった現代社会。人と人とのつながりは軽視されがちです。特に学校では協力や共同することよりも、個人間の学力競争が求められています。一方、金森俊朗は著書『子どもの力は学び合ってこそ育つ—金森俊朗学級 38 年の教え』の中で「学力とは、自分と自分を取り巻く世界を読み解き、それを自分のことばで表現し、他者に伝え、交流する力だ」（138 頁）と述べています。他者との交流が本当の学力というのです。

ただし、単にみんな仲良く、ということではなく、金森学力論の場合は学びの内容と自分を絡めたり、自分を掘ったりすることを基盤としています。生きている実感、自分をいい面悪い面ひっくるめて捉える視点、自分が見えてくる学びこそが自尊感情（自己肯定感）を高めることになります。また、自分の置かれた辛い状況を受け止めてくれる共感的他者の存在も、自尊感情を高めるのに重要です。

新美南吉の今回取り上げた作品は、非常に些細で日常的と思われる部分が詳細に描かれていて、肝心の井戸を掘る場面は描かれていません。どこに作者の力点があったかと言えば、海蔵の井戸を掘ろうとする過程の心の動きです。利助さんや道を通る人たちに対する労りの気持ちはお母さんとの会話で育まれたものでしょう。また、地主への悪い思いを反省したのもお母さんから諭されたからです。お母さんという共感的他者がいたからこそ、海蔵は井戸を掘るまでの過程で自分を見つめ直し、思いを新たにしていけたのです。

最後一気に場面が変わり、日露戦争へ海蔵が出征する場面が登場します。余りに唐突な展開です。この点は、作品の発表されたのが 1942 年であることに着目したいと思います。太平洋戦争が始まった後に発表されたわけで、時代背景はこの作品に大きな影響を及ぼしていると考えられます。井戸を掘って人の役に立ったという話で終わらせなかった意図は何でしょうか。文面では「勇ましく日露戦争の花とちった」とあります。こうした慎ましく地道に生きてきた人々の日常を奪い、命を奪う戦争への嫌悪感、理不尽さが行間に込められているように思えます。そこに彼の反戦意識があったのではないのでしょうか。直接戦争批判はしていないけれども、戦争が人の一生を奪っても人の生きた証は残ることに希望を見出そうとしているようです。

かつおきんや氏は『時代の証人 新美南吉』で、新美が作品を書く際に実際取材に訪れた井戸堀職人の存在や本当に掘られた井戸が残っていたことを突きとめています。つまり、この作品は全くの作り話ではなく、新美自身リアリズムを感じながら書いている作品なのです。作品の背後にある思いや、より具体的に場面を想像しながら深く味わうことで、文学の授業はより豊かで心を育てることになります。

教育現場は基礎学力の向上のために反復練習などこなす作業が多い現状ですが、ちょっとした時間でも、いい作品を子どもと読み合い交流し合うことが大切なのではないでしょうか。